



### ③現地 C43 エロージョンが激しい区画

- ・エゾシカとエロージョンの被害が原因で植栽木が枯損。
- ・防鹿柵は8月に完工。
- ・土壌凍結との関わり合いがあると考え状況を観察。
- ・ヤチダモ等の母樹もあるが、母樹由来の稚樹はほとんどなく、生えてくるのは母樹にはない先駆性で風散布型のダケカンバやケヤマハンノキ、ヤナギ等。

このようなことが話し合われました。

この箇所は掻き起こし過ぎてしまったが、ササの中に地ごしらえで多目的に植えていく事で良いのではないか。ここは作業道のために削ったのか。

苗を植えた後にササの影響を受けて枯れる懸念があり、バックホウでササの根茎まで掘り取った。

全体の会議の際に、ササを根茎から掘り取ると土砂が流れることになり、逆効果であると発言してきた。

ササを掘り取った後に木柵工を行うのは過剰投資である。こういった侵食を起こさない程度の面積でササを刈り取って植えていくのが良い。

既に掘り起こしをした箇所の例を踏まえて、笹地9より北の方では、ササの地表部だけ刈り植栽した後、丹念にササを刈り払っていく方法を行う。また、全面的にササを刈るのではなく、坪刈りや筋刈りなどの省力的な方法で行う。

3mぐらいの若木が生えたとササは陽が当たらない為、自然に枯れる。エロージョンの影響はそれほど無く、短期間で考えずに予算が無いのであれば時期を待つと良い。

- ・去年の委員会で植生の回復とともにエロージョンが緩和されるのではないかと報告したが、ササの侵入が進まないところでエロージョンが新たに発生している。
- ・ほとんど平たく見えるような尾根でも面状侵食が起きている。
- ・場所に応じて工法を変え、面状的に洗われた部分をどうするかが課題。

一昨年の委員会で、早急にエロージョン対策を行うべきと意見があった。しかし、植生の回復とともにケヤマハンノキ等が入り込んでおり、先駆樹種や草本類が入れば、いずれは収まると思い去年提案をした。早急な対策が必要であれば治山工法を採用する。

挿し木は強いドロノキを利用すると良い。

この地域の木を使用するという基本方針があり、この山にドロノキは無い。最初からミズナラの林やハルニレの山を作ろうとして失敗した。自然の遷移に従い、強い先駆樹種から植林を行っていく。

表土を剥いだところは天然生稚樹が出てこないが、何も手をつけていないところはササの中からヤチダモが出ている。

防鹿ネットが無い時期に出てきたのか。その場合は、ササが有効である。

尾根にヤチダモを植えた事でお叱りを受けたが、尾根でもヤチダモは密生してきており間違いではなかった。

天然更新でこれだけ出てくれば良い。

事業実行にあたってはササの表面だけを刈る。全部刈るのではなく、植えたところの周りだけ刈り効率性を考え、筋状に刈るなど工夫していく。

## 再生事業地視察：達古武地域

環境省釧路自然環境事務所の案内により、植栽場所に防鹿柵を設置した場所と、稚樹が多くみられた場所についての状況、間伐施工区等について視察した。

- ・実施計画作成当初に比べ、エゾシカ被害が顕著な状況となり、防鹿柵等の対策の必要性が出てきている。
- ・カラマツの下層に広葉樹の稚樹を定着させるために、間伐の効果検証を実施。

### ①現地7工区：②H25年度間伐区

- ・2014年1月にカラマツの間伐密度40%の間伐施工を実施。
- ・植栽木の光環境や伐採時に植栽した広葉樹に被害を及ぼさないため列状間伐を実施。
- ・作業路はバックホウで段切りを行い、切り土、盛り土が大量に発生しないように配慮し作業を実施。
- ・森林作業道は水の流れも出でらず、良好な環境。
- ・将来的には苗木が順調に生育し体制が整った後は植栽を検討。
- ・奥に母樹帯がある為、地表処理のみで対応するかは検討課題。

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

間伐後、どんな苗を植えているのか。苗畑で作っているものか。

達古武で育てている広葉樹のダケカンバやミズナラ等を植える予定。気象害で釧路の苗畑の苗木が全滅した場合などのリスク管理の為に、3割程度の苗木を札幌でも育てている。

雷別地区と同じように土壌凍結は起きているのか。

土壌凍結は起きていると考えられるが、地表処理は行っていないので土壌凍結により土砂が動いた等は確認出来ていない。



### ②現地1工区：③稚樹調査区

- ・防鹿柵外の被食状況について調査を実施。
- ・調査の結果、食害を受けている稚樹は80%程度みられたが、今年新たに被害を受けている食痕は、25%程度であった。
- ・今年についてはエゾシカが少なかったと想起させる。
- ・2010年度から2013年度までは、成長が停滞し、徐々に枯死していった。
- ・2014年度は残存している稚樹に関しては、ほぼ成長に転じている。
- ・2013年度から2014年度の間には、エゾシカの囲いわなを達古武地区に設定し、捕獲試験事業を行った為、エゾシカの影響が低下していると推定される。

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

雷別地区と同じく、エゾシカに何度も食害にあっているが、今年はよく伸びている。200cm程度になるまで食害にあわずに生育できれば、その後の更新が期待できる。

### ③現地2工区 植栽木追跡調査

- ・2010年度に列状間伐を実施し、その後植栽。
- ・達古武の自然林に元々あった樹種を選定し、多様な樹種を植栽。（ダケカンバ、ミズナラを主とし、他にアオダモ、ハルニレ）
- ・この苗木は、達古武地域、またはその周辺地域から採取した種子を使用し、植栽時50cm以上の苗木に関しては大変良好な結果であり、今後の方針としては大型の苗木を植栽すべきとした。

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

ミズナラを植林している場所の奥は何故、列状間伐せずにそのまま植えたのか。伐倒の際、植栽木などを傷めないか心配だ。

ミズナラを植栽している箇所は間伐区の林縁になり、その奥がまた別の植栽区である。指摘のあった箇所は、植栽密度、間伐が必要な基準値450本/ha以下であった。上木や枝が成長を阻害する可能性があるため、今後の検討課題だ。

カラマツ材の用途は何か。

用材に適していないカラマツが多い為、パルプ材になる事が多いと考える。

### ④現地 A-2 ⑤稚樹調査区

- ・10年前は、稚樹が大量にあった為、地表処理をしない地区とした。
- ・達古武地域における保全エリアの基準は、稚樹密度が0.18本（樹高50cm以上）/㎡以上。
- ・2003年度当時の稚樹本数0.35本/㎡と比べ、現在では調査区稚樹本数0.12本/㎡まで低下。
- ・特に樹高250cm以下について2003～5年度の調査時には多数確認されたが現在では大幅に減少した。
- ・現地では、エゾシカが好んで食べるアオダモの稚樹や幼木の減少が顕著で、食痕が多数確認された。
- ・エゾシカによる被食が要因と考える。
- ・東部保全地区についても今年の被食は少なかったが、エゾシカの密度が減らなければ、被食の圧力が増えるのではないかと懸念。

このようなことが話し合われました。

樹高の低い稚樹がなく、上木の密度が高いようだ。ここは掻き起こしやササ刈りの試験区であり、上木を伐採することも考えられる。

掻き起こしでの更新はしていないが、天然更新の稚樹は大きくなっている。冬先からエゾシカが集まってきており、囲った所と囲っていない所とで10年間でこれだけの差が出るのは大きい。

## 小委員会

## 達古武地域自然再生事業について

このようなことが話し合われました。

カラマツ間伐を実施していない場所での伐採・集材する方法について教えていただきたい。

植栽した苗木の上木にあるカラマツの扱いについては、自然に枯損させるか、地域住民の意見などを踏まえ木材として利用するか今後検討していく。視察した7工区及び8工区は、伐採後の搬出作業を視野に入れ、次回のカラマツを伐採する際に植栽した苗木を傷めない列状間伐を実施予定である。その他については植栽木への被害が少ない方法を検討していく。

林業経営も視野に入れた検討が必要ではないか。釧路湿原のみを考慮すると今まで通りでも良いが人口が減少しては意味がなくなるのではないか。

環境省で実施している本事業が林業経営上可能なのかは疑問がある。将来的には人工林が自然林に向かう方法を示していきたいと考えている。

林業経営の議論の必要性は感じるが、道東全体・林業全体の問題として議論すべき課題である。